

審判の心得と責務

下記の心得は一つの考え方として紹介しています。その他説明事項に関しても詳細は大会当日の役員にご確認ください。

1. 審判の心得

- ・審判は絶対でなければいけない。ゆえにいかなることにも毅然と対応し、コート上での神にならないといけない。
- ・判定に対し抗議を受けた場合にも毅然とした対応をしなければならない。もしあまりにも執拗な場合にはその抗議を行った者に対して警告を与えるべし。
- ・判定は即時に下さなければならない。
- ・審判を欺く行為は絶対に許されてはならない。もしその行為に遭遇したときには厳罰を以ってそれに対処せねばならない。また特にその行為の常習者に対しては細心の注意を払わねばならない。
- ・審判は選手よりもすばやく、しかもタフでなければならない。的確な判定を行うためには、選手以上の集中力と持久力が不可欠である。
- ・判定は不偏にして公正でなければならない。
- ・常に冷静でなければならない。いくら抗議を受けようとも、感情的になって勢いで判定を行わない。
- ・権威にあぐらをかいてはいけない。確かにコート上では神であらねばならないが、神であるためには常に完璧に近づくために努力を続けねばならない。口が裂けても『審判も人間だから』『これもバレーだ』などという台詞を自ら口にしていけない。万が一誤審を犯したときは謙虚にそれを受けとめ二度と繰り返さない努力をせねばならない。権威ばかりを振りかざしそういった努力をしない人間は、即刻審判を止めるべきである。

『マグナムカップWEB担当サーカー審判論引用』

2. 責務と権限

2-1. 主審

主審の意義

試合の統括責任者

主審の責務

- 1.主審は審判団のメンバーが下した判定が間違っていると確信した時、それを無効にすることができます。
- 2.任務を遂行していない審判がいるときは、その審判を交代させることができます。
- 3.競技規則に明示されていない全ての問題を含めて、競技上のあらゆる問題を決定する権限を持ちます。
- 4.主審は自分の下した判定に関していかなる論争も許してはなりません。
- 5.ゲーム・キャプテンから要求があった時には、主審の判定の基礎となった競技規則の適用あるいは解釈について説明して下さい。

主審が吹笛すべきではないジャッジ

サーブ時のレシーブ側のアウトポジション

2-2. 副審

副審の意義

主審の補佐

副審の責務

- 1.相手方コートおよびネット下方の空間への侵入：パッシング・ザ・センターライン
- 2.レシービングチームのポジションの反則：アウトオブポジション
- 3.ネットの下方の部分に触れるか副審側のアンテナに触れた場合：ネットタッチ
- 4.バック競技者がブロックを完了したりリベロプレーヤーがブロックを試みた場合
- 5.ボールが外部の物体や床に触れて主審がその接触を確認できない場合
- 6.タイムアウト・メンバーチェンジ
- 7.非常事態

副審が吹笛すべきではないジャッジ

副審は上記の事項以外は基本的に笛を吹いてはならない。但しジェスチャーは許される。基本的に副審はレシーブ側のチームの状況を監督しボールを目で追いかけてネット際（特にプレー後のフォローの動きにおける反則）に着目して注意深く審判して下さい。

また主審が明らかにミスジャッジをしていると判断できた場合は、主審席まで駆け寄り教えることも必要なことであると考えられます。但し最終判断は常に主審に任せてください。基本はジェスチャーで主審に知らせることです。

2-3. 線審

線審の意義

主審の補佐

ジャッジの種類

線審のジャッジは以下の7種類があります。

1. 線審が担当するラインにボールが落下したとき、又は線審の位置近くにボールが落下したとき：インまたはアウト
- 2.レシービングチームがアウトボールに接触したとき：ワンタッチ
- 3.ボールがアンテナに触れたときやサービスされたボールがネット上方の許容空間の外側を通過したとき：アンテナ外通過
- 4.サービスが打たれた瞬間に競技者（サーバーを除く）がコート外に踏み出していたとき
- 5.サーバーのフットフォールト：ラインクロス
- 6.競技者がプレーを妨害しようとしてアンテナに触れたとき
7. ボールがネット上方の許容空間外側のネットの垂直面を通過するか、またはアンテナに触れたとき主審から要請があった場合、線審はその合図を繰り返さなければならない
- 8.判定不能

2-4. 記録

記録の意義

得点・メンバー・ローテーションに間違い・不正がないかをチェックする

記録員の役割

試合前

1. それぞれのチームからスターティングラインアップシート（目玉）を受け取り記録する
2. 試合開始時間を記録する

試合中

1. 得点版が常に正しいか確認。間違いがある場合にはすぐに副審に伝える
2. サーブ順が常に正しいか確認。間違いがある場合にはすぐに副審に伝える
3. タイムと交代を記録。その回数を副審に伝える
4. 不当なタイム（3回目のタイム、コートキャプテン・監督以外の要求）や交代の要求（7回目のタイムや、交代の仕方に問題がある場合）にはすぐに副審に伝える
5. セット終了時には副審・主審に伝える
6. アクシデント（レフリータイム・例外的な交代・点数のミス）があった場合には特記事項に記載する

試合後

1. 最終結果、試合終了時間を記録する
2. 意義があった場合には特記事項に記載する。キャプテンに記載させても良い
3. 記録用紙に自分のサインをした後、チームキャプテン・副審・主審の順番でサインを貰う

3. 無資格審判員へのワンポイントアドバイス

主審

- ・ 笛は短く、強く吹く（初心者審判に取ってもっとも重要な事項のひとつです）
- ・ 笛は『ピッ』（通常）『ピッピ』（注意）が良い。『ピーピッ』『ピッピッー』は好ましくない。試合開始も『ピッ』
- ・ 整列時の挨拶の笛を吹くときに審判代台の下に立ち、副審の左側に立つ
- ・ コイントスはジャンケンではなくコイン（小銭でOK）で行う。コインの裏表のチームは主審が決める）
- ・ コイントスの時には主将と握手をする
- ・ 挨拶時の笛の後は副審と握手をする
- ・ 審判台からはいかなる時も下りない（緊急時を除く）。用がある時には副審、線審を呼ぶ
- ・ タイム・メンバーチェンジは副審が笛を吹いたら、自分は吹かない（選手が気づかないときには別です）
- ・ ジャッジは基本的に変えない（選手が自己申告してきたときには変えるべき）
- ・ ジャッジに迷ったら副審・線審をまず呼ぶ。選手は遠ざけること、会話は聞かせない
- ・ 副審・線審を読んだら『自信がりますか？』と聞いてみてその答えと自分の考えを総合的に判断して最終ジャッジを下す
- ・ 笛を吹くタイミングは何か合った『瞬間』。タイミングをずらさない（選手の主張があってから吹笛は良くない）
- ・ アウトオブポジションは試合の序盤で取ること。選手にしっかり見ていることをアピールする
- ・ ドリブル・ホールディングは基本的に取らないことで統一したほうが良い（判断がしっかりできるなら別です）

副審

- ・ ブロック側のネットタッチ、パッシング。サーブカット側のアウトポジションだけは最低でも見る
- ・ イン・アウトはジャッジしなくて良い（線審に任せる）

- ・ワンタッチのシグナルは目立たないように出す事（お腹の前で控えめに手を交差）
- ・ラリーが終わった後は主審のジェスチャーと同じことをする
- ・常に記録との連携を図る（得点・サーブ順が合っているかコマ目に確認）
- ・アウトオブポジションは試合の序盤で取ること。選手にしっかり見ていることをアピールする
- ・目玉の確認は10秒以内/1チームで行う
- ・主審が明らかなミスジャッジをしていると判断したときにはラリー後に教えに行く（4本目でボールを返したのに見逃したなどのケース）

線審

自分の担当ライン+自分の近くの角の半径1メートル+エンドライン後方へのアウト・ワンタッチ+アンテナや障害物に当たった場合には必ずジェスチャーを行う

記録

サーブ順のミスや、点数のミスはすぐに副審に報告。ラリー前なら副審に頼んで試合を止めてもらう。曖昧なままラリーをさせない

4. よくある質問 Q&A

コイントス

コイントスで勝ったチームはサーブ選択権かコート選択権を選べます。

例)コイントスに勝ったチームがサーブカットを選択しました。この場合このチームはコート選択権はありません。サーブカット=コート選択権ではないからです。サーブカット=サーブ選択権とされます。

レフリータイム

怪我人が発生しまった時のための緊急措置です。チームが6名ぎりぎりでも尚且つ、タイムアウトを2回とってしまっている場合のみ、主審の判断で3分間タイムを与えることができます。3分たってもコートに復帰できない場合にはそのチームは棄権になります。

リベロの反則

リベロの反則とは以下のとおりです。

- 1.フロントゾーン（アタックラインとセンターラインの間）でリベロプレーヤーがオーバーパスで上げたボールをネットより高いところで相手コートに返した場合
- 2.リベロプレーヤーがネットより高いところにあるボールを相手コートに返した場合。（1本目・2本目含む）
- 3.リベロプレーヤーがブロックに跳んだ場合

副審と線審のジャッジが違う

副審と線審のジャッジが違う 最終的に決めるのは主審です。主審の判断が絶対なので副審・線審のジャッジの違いは問題ありません。